

## 記念館オープン特集

# 『村田清風記念館』 建設の意義



今月号は、八月一日にオープンした「村田清風記念館」の建設の意義や役割を掲載します。執筆者は、幕末の長州藩を研究され、特に村田清風や周布政之助に造詣のある、元山口県立博物館長の石原啓司さん(田万川町在住)です。

尚、開館行事や館の案内は次回にお知らせします。

三隅町立「村田清風記念館」の開館を心からお祝い申し上げます。このたび建設された記念館は博物館施設の種類からすれば、「歴史民俗資料館」として位置づけられます。

歴史民俗資料館が、全国各地に建設されはじめたのは、昭和四十年代の高度経済成長のもとで日本の伝統的な生産や生活の用具が急速に消滅しはじめた頃です。

文化庁は文化財保護法を改正し「民俗文化財」の指定と保護をうちだし、各県に歴史民俗資料館の建設を呼びかけました。もちろん、戦前から「郷土館」と呼ばれた郷土資料の展示施設はありました。しかし、郷土館と歴史民俗資料館は基本的に異なっています。

郷土館は、単なる資料展示施設ですが、歴史民俗資料館は過去から現在に伝えられてきた、さまざまな文化財を収集・保存

し、調査・研究して、その資料を展示することによって、地域の歴史や文化財に対する理解を深めるための施設です。

また、地域の皆様が、先人の生活の知恵や、物の考え方を今に呼び起こし、現在生きている人々の価値ある生活や文化を創造するための拠点となる施設でもあります。

従って、歴史民俗資料館は住民の方々の自発的な生涯学習の場として活用できるような魅力ある施設とすることが必要です。清風記念館の「研修室」がこれにあたります。

また、この施設の特徴は、行政が建物を建設しますが、収集する資料は、皆様方のご協力によって、また直接、皆様方の手によって行われることです。

資料館の充実と活用は、まさに三隅町在住の皆様方の手中にあります。

村田清風記念館が、全国市町村の歴史民俗資料館と異なり、特筆すべきものを持っていることも忘れてはいけません。

戦後、日本の歴史教育は、政治経済の記述を中心に置きすぎたため、教科書の中から歴史上の人物を忘却しがちでした。



多くの日本人は、テレビの歴史ドラマで歴史を学んでいるといっても過言ではないと思います。それは、戦後の歴史教育の盲点です。歴史は人が作るものであり、激動の時代であれば、あるほど個性

豊かな、すぐれた人物の先覚者としての業績が大きく歴史を変えてゆくものであります。

幕末維新の激動の時代、長州藩から多くの人物が輩出しましたが、その要因には藩校明倫館の充実と長州藩の教育水準の高さと底辺の広さがあったことはまちがいがありません。

しかし、藩校明倫館の充実に大きな力を発揮し、人材登用の道を開いた先覚者こそ、村田清風と周布政之助でありました。近年、この偉大な先覚者の生涯と足跡を知る人々がすくなくなりました。

清風記念館の建設によって、改めて多くの人々に二人の先覚者の偉大さを認識していただけることを心から期待するものであります。

他方、民俗資料展示室は、ふるさとの生業を支え、豊かな文化を継承してきた先人の生活に思いを致すコーナーです。これらの生産用具は、美術工

芸品のように特定の名匠の手になる芸術品ではありませんが、土の匂い、潮の香りのもとで、私たちの先祖の生活が残した貴重な文化遺産であります。

生産用具の展示の条件は、単なる資料の羅列ではなく、仕事の展開にそって展示し、現在でも、それらの用具を使用すれば当時の生活の復元可能なように展示するのが原則であります。

今後とも資料の収集を続けられ戦前の生活様式が判る世代の方々が健在のうちに完成することが大切だと思います。

歴史民俗資料館を地域の皆様が積極的に活用されることによって、地域の伝統文化を正しく後世に伝えることが可能になり、更に発展させる意義ある活動ができると思います。

近年、ともすれば国際的視点が強調される反面、人々の愛郷心が忘却されがちですが、この歴史民俗資料館は、地域の皆様の強い愛郷心を高揚させる大きな拠点としての役割も担うものと確信します。

村田清風記念館の建設そのものが、三隅町の歴史における一つの大きな事実であります。平成七年の三隅町の文化を示す最も確かな資料でもあります。

今後の記念館の意義ある活用が、三隅町の文化創造の拠点となることを心から期待するものであります。